数学セミナー 2017 年 5 月号 Coffee break

想いを紡ぐ作業

数学をすることと絵を描くことは似ている、と以前から感じていた。私はお気に入りの画家の絵を模写することが好きで、たまに押し入れから絵の具やらを引っ張り出して、その時の気分にあった絵を模写する。画用紙と原画に２次元の座標を入れ、座標曲線で囲まれた四角形の中をひとつずつ模写していく。下書きをし、補正をし、色を付け、補正をし、全体のバランスを整え、直しを入れて仕上げていく。私には一から絵を描く才能はないけれど、自分の絵を書き、それを仕上げていく作業の感覚は、数学を通して、なんとなく知っているような気がする。

小説家の村上春樹さんが、「小説を書く時、大体の構成が決まれば、あとは『オートマこびと』が勝手に進めてくれる、だから話が想定と全く違う方向に進むこともある。一通り書いたあとは流れを整えたり細かい言い回しを変えたりと、『とんかち作業』の連続だ。」と（いうようなことを）なにかに書いていたのを読んだときには、ちょっとした衝撃だった。（厚かましいけれど）私が数学するのとおんなじじゃん、と思ってしまった。小説は読む専門だったから、書く方の立場を想像したこともなかったけれど、村上さんの言っている作業には、ありありと身に覚えがある。

とにかく、芸術家も小説家も数学者も（建築家も？）似ているのかも、と、なんだか奇妙な仲間意識を持ってしまった。もちろん人によるのだろうけれど。脳の波形とか調べてみたら、実際すごくよく似ているのかもしれない。知り合いの脳科学者に調べてもらいたいくらいだ。

∞

このあいだ、京都の平安神宮のカフェでふと手にしたオノ・ヨーコさんのエッセイがとても面白くて、初春のほころんだ空気と、手に持ったカフェラテのぬくもりもあいまって、なんだか許されたような気分になって、一人でくすくすと笑いだしてしまった。豊かな感受性と、人に寄り添った信念と、それを内包できるだけの人間性に裏付けされた素直な発想は、こんなにも人の心に響くのだなと。そういえば昔、同じことを岡本太郎さんのエッセイを読んだときにも感じたような気がする。全く違う世界に生きていても、考え戦い続ける人の根っこには、想いの共通部分があるのかもしれない。

豊かな感受性、信念、素直な発想。自分を自然に表現するということはとても難しい。それをするには世界は雑然としすぎていて、無理やり考えれば考えるほど、遠ざかっていくような気がする。『オートマこびと』は、心が澄んで解放されているときにしか現れてくれない。

そうやって雑然に飲み込まれて行き詰ったときには、自分の居る場所からすこし広い世界に出かけてみるといい。いろんな景色、いろんな表情、いろんな考え方や価値観をさらさらと体に通過させていく。そうして自然と残ったものを見つめてみる。

巻頭なのになんで coffee break（休憩）なの？とずっと疑問に思っていた。でも、今はしっくりきている。まず coffee break でしょ、と。

朝起きて、カーテンを開けて、挽きたてのコーヒーを入れて coffee break をして、日常の雑然とした物事を香ばしい香りに乗せて一旦全部追い出して。さあ、今日はどんな数学に出会えるだろう？なんて。なんて贅沢な時間！

[すずきさきえ]